

# 火星

平成二十四年二月号



七曜抄 (八)

山尾玉藻

夜の川に沿うてゆきたる熊手かな

一陽来復書架の梯子に日のおよび

古ふくべ叩き踊れば水涸るる

墓石の裏ばかり見ゆ蜜柑の木

元日の道に出てゐる懐手  
家内の一二日の音もふたりなる  
灯ともして紙漉く貌となりにけり  
ランタンの下の豚足寒波くる  
床の上の正座の母に木菟啼けり  
闇汁のそろそろ飽いてきたる闇

（一部「俳壇」一月号と重複）

# 太白星

柳生千枝子

こほろぎの闇の深さを思ひ寝る  
祭の灯届かぬ隅の虫の声  
秋祭出店のあれもこれも欲し  
秋祭つなぐ母の手あたたかく  
秋祭暮れて屋台の灯が明し  
新蕎麦へ割箸パキと割りて待つ  
芋嵐快感となる風の音

杉浦典子

日当たれば流れの速し紅葉溪  
風のなき蕎麦畑より暮れてゆく

裏の戸を確かめに出し十三夜  
綱引きの綱地に置かれ鱒雲  
山の上に昼の月ありハープテイ  
醉芙蓉カーブミラーに誰かゐる  
母の忌の金木犀をみな仰ぐ

浜口高子

夕鴉の声とび込みしとろろ汁  
木の実降る降る雲水の早足に  
重陽の水を発ちたる鷺の白  
露草に樓門の影及びたり  
仏足石の指跡うする返り花  
霜降やひとつひとつの稲ぼつち  
漁網干す日おもてを飛ぶ冬の蠅

# 火星作品

## 山尾玉藻選

十三夜蚕屋の障子の毛羽立つる  
八幡大山文子

刈田道伊勢の神楽の二人連れ

秋の蚊に耳朶うすき男かな

新豆腐暮れて近づく男山

放屁虫畳を歩く夜の会議

きりぎりす母が何やら書いてゐる  
大和郡山城 孝子

未枯やはんざき眠る瀧の口

ほとけらに障子あかりの萩すすき

蓑虫の貌に日の射す芋煮会

ごつたに飛ぶ淀の穂絮やうそ寒き

片付けて二階のさみし金木犀  
宝塚蘭定かず子

四五人の葦刈る音に出くはしぬ

朝寒や通過列車に人の貌

神留守の船の柱のひしめける  
 無患子や日暮は子らの散りやすく  
 ひとつまみ胡麻をおはぎへ今朝の秋  
 八幡飯塚糸子  
 叡山の入り日まみれの鴉の贅  
 胡麻叩く腕片方昏れてゐし  
 どの橋も神の留守せる京かな  
 悉く田水のおちし鹿の声  
 高たか円ま山どに寄りてとどまる秋の雲  
 神戸深澤 鱻  
 頂へ萩のうねりし白毫寺  
 閻魔堂ありかはらけに新小豆  
 水中を木の实流るる汽水かな  
 子午線の見えぬを見やる神の留守  
 宝塚高松由利子  
 ゆるやかな背骨の模型小鳥来る  
 枯色の尻よりせまるばつたかな  
 ほかの木の日当つてゐる松手入  
 葛紅葉ナイフフォークを使ふ昼  
 門に立つ助役の揉み手新走

# 選のあとに

山尾 玉藻

の萩すすきゝの素直な叙景句から生れる清澄な情趣に、昨秋訪れた秋篠寺の仏たちの景が彷彿とよみがえる。

刈田道伊勢の神楽の二人連れ 大山 文子

片付けて二階のさみし金木屋 蘭定かず子

この地方では秋の収穫の祭儀に伊勢から神楽師を招くのである。今年も刈田道を二人の神楽師がやって来るのが見える。四方に広がる刈田色の中の二人連れのシルエットがとても温かで、収穫を終えた村の安堵感を象徴するかのようである。同時発表作の「十三夜蚕屋の障子の毛羽立つる」、  
「毛羽立つる」と蚕屋の粗雑な障子紙にのみ焦点を絞り、十三夜の月明りの蚕屋内の冷やかさを想像させる。

二階の片づけを漸く終えた作者だが、がらんとした二階にこれまでの雰囲気ではなくなったもの足りなさを覚えた様子である。この思いは作者にとつて思いがけぬものであり、それを「さみし」の感情に結びつけたのは部屋内に静かに漂う金木屋の清澄な香の所為であろう。へ朝寒や通過列車に人の貌、プラットホームに立つ作者に今朝の寒さをより実感させたのはどのような風貌だったのか。放り出したような詠法が効果的。

ごつたに飛ぶ淀の穂絮やうそ寒き 城 孝子

胡麻叩く腕片方昏れてぬし 飯塚 糸子

秋も深まる淀の河川敷では葎、萱、浅茅、芒、蒲、真菰など、様々な穂絮が光を纏い揺れている。本来ならそれらの穂絮が風に乗って舞う景は眩しく美しいものであろうが、作者は余りにも諸々の穂絮が入り乱れて舞う様子にやや圧倒されたようだ。「うそ寒」とは何とはなく肌を感じる寒さを言い、圧倒された思いがこの感覚的な寒さを呼んだのである。「ごつたに」とは実感にほかならない。へほとけらに障子あかり

短日の農家の庭先での囁目詠か。よく見ると胡麻を叩く人物の片腕だけが早くも夕暮の陰りをおびており、その顕著な変様に作者はこころ惹かれた。胡麻が叩かれる様子はここでは切り捨てられ、作者の眼はふと捉えた一つの事実にだけ向けられている。この小さな驚きが「短日」の本意に繋がっている。へどの橋も神の留守せる京かな、いかにも京都らしい神留守の趣を描いた。

# 恒星巻

山田美恵子

瓢箪の自慢に及ぶ襦宜の酒  
きざ柿の良きころあひの古墳山  
高枝 鋏 秋雲をさぐりけり  
ヘルメットより秋冷の髪撒かれ  
鬼の子にかぼちやランタン灯りぬ

松山直美

山本耀子

寺田屋に灯の入りたる秋簾  
東山背に利酒の列に居り  
立冬や紙はみ出せる筆の先  
母の家出でて仰げる後の月  
木犀の香に父の忌の始まりぬ

皿に朱を溶く指先も秋灯下  
やや曲る萩の枝の筆蚯蚓鳴く  
よき縁の庭にまそほの薄かな  
しいしいと児をうながしぬ花野中  
橡の実のつやケータイにのせてみる

村上留美子

蘭定かず子

秋深しハーブ叢に顔つつ込んで  
新藁の香をこぼし行くコンバイン  
揺るる気のとほに失せぬし大絲瓜  
籾殻の山高くなる日の翳り  
蓮の実の飛んで静もる湖畔かな

船具屋の細く開きあり秋つばめ  
能勢の子に空の果てなし曼珠沙華  
柿挽ぎのみんなに空の眩しかり  
その奥の清盛塚へ草もみぢ  
海に出て鳥の光れる神無月

# 獅子座

山尾玉藻推薦

西村節子

耳疎くゐる日や萩の零れつぎ  
神將に奉ず灯や獵期来る  
秋蝶のなほのぼりゆくふたつか  
ふやけたる手に盛られゆく鯛かな

笠置早苗

雨筋のきらきに見ゆる花野かな  
銀やんま影を放ちて発ちにけり  
秋夕焼け鴉玉虫色をして  
秋の宵水よりうすく人の影

涼野海音

黄落や飛び立ちさうな風見鶏  
ひよんの実を探していつの間の一人  
月の家の鏡の前を通りけり  
ネクタイの裏にイニシャル秋の風

藤田素子

風澄んでまむし酒瓶並びをり  
雑穀を混ぜし新米ほめらるる  
冷まじや禁煙外来より女  
紅葉山オーブンカーの後走り

西畑敦子

花野より花野にとばすフリスビ  
色街の路地に迷ひしちんちろりん  
曼珠沙華三角巾の子がひとり  
母在さば田仕舞餅の届くころ

大川八重子

魯田の吹かるる村を素通りす  
見送りつつ次の約束十三夜  
老鹿に松ぼつくりの散らばれる  
忌の明けや爪たてて剥く青蜜柑

根本ひろ子

蜘蛛の囀を払ふ行く先秋遍路  
陵のいつまで赤き烏瓜  
夕ぐれの柘榴の色をあやぶみぬ  
粉殻焼きの煙のなかの宇陀郡